

シングルマザーの家族生活と仕事生活に関する生活戦略

—— 計量的分析による検討 ——

末 盛 慶
小 平 英 志
鈴 木 佳 代

要 旨

ワーク・ライフ・バランスが社会的に注目されて久しい。しかし、これまでのワーク・ライフ・バランスに関する研究は共働き世帯を対象とすることが多かった。一方、ひとり親のワーク・ライフ・バランスを検討する研究は少ない。

ひとり親に関しては、相対的貧困率の高さが社会的に認識され多くの研究が行われているが、ひとり親の生活実態—特に家族生活と仕事生活の調整—に関しては十分に明らかにされていない。

そこで本研究では、名古屋市に居住するシングルマザーを対象として量的データを用いて家族生活と仕事生活の両立・調和をめぐる生活戦略がどのような要因によって規定されているのかに関する分析を行った。分析対象は就業して子どもをもつシングルマザー 113 名である。

分析の結果、①シングルマザーの年齢が低まるほど、子育てと仕事の両立について上司や同僚に相談していること、②年齢が高まるほど自分の睡眠時間を削っていること、③学歴が高いほど親族に子どもの世話を頼んでいること、④親との関係性が良くないと親に子どもの世話を頼まない傾向があること、⑤伝統的な性別役割意識を持つ程、出社時間を遅らしたり、退社時間を早めたりしていることが示された。

以上の結果から、年齢や学歴などが示す社会構造による規定性ととも、親との関係の良好性や自身の社会意識などシングルマザーが置かれる諸々の状況により家庭生活と仕事生活を調整していく際にとられる生活戦略は変化することが示された。

キーワード：ひとり親、ワーク・ライフ・バランス、生活戦略、ジェンダー、時間の貧困

1. 問題の背景と目的

近年、ひとり親の生活困難が社会的に注目されている（赤石 2014：神原 2020）。例えば、日本のひとり親の相対的貧困率をみていくと四半世紀にもわたって約5割という状況が現在まで続いている（厚生労働省 2017）。ひとり親の相対的貧困率は他の世帯よりも高く、国際的にみてもかなり高い貧困率となっている（内閣府 2022）。

相対的貧困率のような全体的な動向に加え、近年ではひとり親—主にシングルマザー—へのインタビュー調査などを通してひとり親の実際の生活をとりあげる報告もなされている（水無田 2010：鈴木 2015）。そこでは、ひとり親が日々の生活の中でどのように状況に対応しているのかについて現状を伝えている。しかし、どれもその各々が実態の記述であり、概念的な整理は不十分と言える。学術的な概念を基盤としながら、シングルマザーの日々の対応を捉える試みはこれまでほとんどなされていない。シングルマザーの日々の対応を学術的な概念を用いて整理することにより、例えば格差や貧困を含めた社会構造の再生産と変動の一端を明らかにするその礎をつくることができる。

そこで本研究では、ひとり親の中でもより生活困難が想定されるシングルマザーを対象にした計量的調査をもとに、シングルマザーがどのように生活の状況に対応しているのか、その対応は社会的にどう規定されているのかを生活戦略という概念を用いて明らかにする。

2. 生活戦略という概念

本論文では、家族生活と仕事生活の両立や調整に際してひとり親がとる諸行為を社会的に分析するために生活戦略という概念を用いる（末盛 2017）。以下では、その生活戦略の概念の特徴を説明する。

日常的に人々がとりうる行為に関して、社会学における社会的行為論が存在する（中村他 2020）。社会的行為論はウェーバーの社会的行為論を基盤とし、パーソンズによる整理で1つの完成をみる。ここまでの社会的行為論の特徴は、行為には目的や目標があるという点を重視するものだった。

近年の社会学の社会的行為論はこの点に批判的なまなざしを向けた。私たちの日々の振る舞いは目標を意識しながら行っているものばかりではない。むしろ自分が無意識のうちに行っている振る舞いも少なくない。そして、無意識に行っている振る舞いは社会の構造に規定されている部分があり、また本人が意識しないうちに現存する社会構造を再生産していく。近年の社会的行為論の中ではこうした点が重視されるようになった。つまり、近年の社会学は従来の社会的行為論より広い範囲の行為を視野に含め検討している。その例がギデンズやブルデュが提示する実践や戦略という概念である（ギデンズ 2015：ブルデュ 1991）。生活戦略はギデンズの実践概念やブル

デュの戦略概念にもとづく概念である（末盛 2017）。

上記の議論を念頭に置きながら生活戦略を以下の通り定義する。生活戦略とは、個人が置かれた状況に対してとる諸行為およびその過程のことである。本概念の特徴は以下の4点である。

1点目は、個人の行為は社会的に規定されているという社会学的な視点を重視する点である。特に本概念はギデンズの実践概念やブルデュの戦略概念に多くを負っている。そこでは、目標を定めた行為に加えて、意識的ではない日常的に人々が行う慣習的な行為も含む。私たちの生活戦略を社会的に規定しているのは何であるのかを理解することは社会学的分析にとって重要と言える。

2点目は、社会構造の制約を受ける前提を持ちつつ、個人の創発的な行為や対抗的な行為も含みうる概念とする。私たちはいろいろな制約によって実際にとれる行為の選択肢は限られている。しかし、すべての行為が社会構造に決定され尽くされているわけではない。個人がなしうる行為の選択性にも着目していく¹。

3点目は分析水準が個人であるということである。このことにより、実証研究に活かしやすくなるものと思われる。量的研究、質的研究のどの研究方法でも扱うことが可能である。

4点目は、生活戦略の規定要因の検討に加え、その帰結に対しても関心をもつということである。これも社会学の理論的伝統にもとづくものである。社会学では、ある行為や意思決定の背景だけでなく、その帰結にもこだわってきた。マートンは意図した結果と意図せざる結果を峻別してきた（マートン 1961）。現代の社会学においても、意図せざる結果を把握することの重要性が改めて指摘されている（ギデンズ 2009）。生活戦略概念においても、ある戦略が目指した結果と必ずしも目指していない結果がどのように生じうるのかという視点を含んだものとする。

以上が生活戦略概念の説明である。次では、生活戦略という概念を意識しながらシングルマザーの日々の生活の対応に関する先行研究等を概観する。

3. シングルマザーの生活戦略に関する先行研究

シングルマザーが日々の生活にどのように対応してきたのかということについては、これまでいくつかの報告がある（中囿 2021）。そのすべてを以下で紹介することはできないが、以下諸報告を紹介していく。

ひとり親に関しては、厚生労働省や各自治体がひとり親に関する調査を定期的を実施している。そこではひとり親の生活実態を把握することが主な目的とされ、どのような対応を日々とっているかという点はあまり調査がなされていない。以下では、シングルマザーの日々の対応に関わる内容に絞って紹介していく。

厚生労働省が実施した全国ひとり親世帯等調査結果報告（令和3年度実施）によると、母子世帯になる前に就業していた者のうち、母子世帯になったことを契機に転職をした者が45.5%となっている。なお、仕事を変えた最も大きな理由として、「収入が良くない」が35.4%と最も多

くなっている（厚生労働省2022）。

平成28年の愛知県ひとり親家庭等実態調査（2017）では、子どもの進学資金のため、貯金や学資保険を加入しているかをたずねたところ、「している」と回答したものが57.8%となっていた。生活費をやりくりしながら子どもの進学資金を貯めている様子がうかがえる一方、4割を超える方が子どもの学費の貯蓄に取り組むまでの余裕がない状況も示唆される結果となった。

自治体の調査では、進学資金の状況に加え、子どもの受診抑制について調査されることが多い。愛知県の同調査でも受診抑制について聞かれており、その結果14.5%の世帯で子どもの受診抑制をしていると回答している。子どもの医療費無料化を行う自治体も増えているが、医療費の無料化に加え、こうした制度を広く知らせていくことも重要になってくる。

シングルマザーの日々の対応に関しては、自治体の調査より研究者による調査の方がより詳しい報告を行っている。中囿（2021）は札幌市で母子寡婦連合会の会員アンケート（以下札幌母子調査）を実施した。その中でシングルマザーの生活状況への対応をめぐる質問紙調査を行っている。以下、その結果を紹介していこう。

シングルマザーが日々の生活のニーズに対応していく際にとる対応の1つが親族からの支援をうけることである。札幌母子調査によると、親族からの支援を現在受けているが26.7%、かつて受けていたが22.5%、受けたことがないが50.8%となった。約半分のシングルマザーが親族から支援を受けた経験をもっている一方、受けたことがないとする者も約半数に上っている。

親族からの支援に加え、生活への対応のもう1つが仕事領域をめぐるものである。シングルマザーは子育てへの対応や所得の向上を考慮し、仕事の変更を行うことが少なくない。札幌母子調査によれば、シングルマザーになったとき、転職経験者が18.2%、無職だったが就職したが30.3%、就職活動をはじめたが22.2%など、各々の状況に合わせて多様な対応を行っていることが示されている。シングルマザーになってから仕事を辞めた経験があるものも55.7%おり、シングルマザーは生活の状況に合わせて仕事を調整することが多いと考えられる。

シングルマザーは自治体の支援やサービスを利用することも想定される。同調査によれば、ハローワーク等の相談支援を利用したものは52.4%と約半数となっている。

同調査では、減収に対する対処法もたずねている。調査の結果、貯金を取り崩しているが31.4%、親や親族からの支援が2.9%、支出をおさえて節約をしている54.3%、公的融資を利用が5.7%となっている。親族や公的な支援を受けることより、貯金の取り崩しや支出を抑えるなど家庭内でとれる対応を優先するものが多く、周囲の人々に積極的に頼ろうとしない現状がうかがえる。

量的な方法による把握に加え、質的な方法によるシングルマザーの生活の把握もなされている。水無田（2014）は6名のシングルマザーにインタビュー調査を行った。その結果、無収入で家事や育児に非協力的な夫から離婚したケースや、海外籍の夫と離婚したケース、家事育児には協力的だったが離婚したケースなど多様な状況が報告されている。こうした現状を踏まえ、今後のシングルマザーの支援の在り方の1つとしては就労支援のみならず、その先のひとり親のワー

ク・ライフ・バランスを考えていく必要があると著者は述べている。

シングルマザーの家族生活と仕事生活に関して取り上げた研究として、田宮・四方（2007）がある。この研究では日本のデータは総務省統計局『社会生活基本調査』の主として、ヨーロッパについては、Eurostat と Harmonised European Time Use Surveys (HETUS) の 10 カ国分の集計データを用いて生活時間の国際比較を行った。分析の結果、日本のシングルマザーは、欧米各国との比較において顕著に仕事時間が長く、育児時間が短いことが明らかにされている。

湯澤（2021）はコロナ禍以降のシングルマザーの子育てと仕事の現状について報告している。認定 NPO 法人しんぐるまざあず・ふぉーらむが実施したパネル方式によるウェブ調査により収集されたデータによると、高い就労率、高い非正規雇用率が明らかにされるとともにコロナ禍により転職者が急激に増える中、以前より求職活動が難しくなり、求人全体の質が低下している現状が報告されている。同データを用いた藤原（2022）も、コロナ禍で休業に追いやられた非正規雇用者が休業補償を受け取れずに収入の減少と生活困難に直面したことを指摘している。

以上から、シングルマザーはコロナ禍以前も以降も家族生活と仕事生活で多忙な日々と生活上の困難を抱えながら生活していることが理解できる。こうしたシングルマザーやひとり親が家族生活と仕事生活の両立により多忙な生活を送り続けている現状を「時間の貧困」と指摘する論者も少なくない（水無田 2014：大石 2015：鳥山 2021）。

限られた検討ではあるが、シングルマザーの家族生活や仕事生活をめぐる生活戦略に関連する報告や研究を概観してきた。以上の結果により、日々の生活に対してシングルマザーがどのような対応をとっているのかに関する概況を把握することができた。しかし、家族生活と仕事生活のより詳細な対応については十分検討が行われていない²。5年ごとに実施される厚生労働省の全国ひとり親等調査においても、悩みや相談相手に関する調査はあるが、家族生活と仕事生活の調整についてシングルマザーはどのように対応しているかに関する検討は行われていない。

家族生活と仕事生活の調整に関しては、ワーク・ライフ・バランスやワーク・ファミリー・バランスというキーワードが社会的に注目されて久しい（高橋 2021）。これまでのワーク・ライフ・バランスに関する研究は共働き世帯を対象とすることが多い（山口 2009）。一方、ひとり親のワーク・ライフ・バランスを検討する研究は少ない。

そこで本研究では、シングルマザーの家族生活と仕事生活の調整をめぐる生活戦略を検討する。具体的には、シングルマザーの家族生活と仕事生活の調整をめぐる生活戦略がどのような条件によって規定されるのかを計量的に明らかにする。

本論文では以下の分析モデルにもとづいて分析を行う。独立変数に位置づけられるのは社会的属性、親族との関係、地域との関係、ジェンダー意識の 4 つである。シングルマザーの生活戦略が社会構造やシングルマザーが置かれた状況によってどれほど規定されるかを見るためにこの 4 つの独立変数群が選択された。

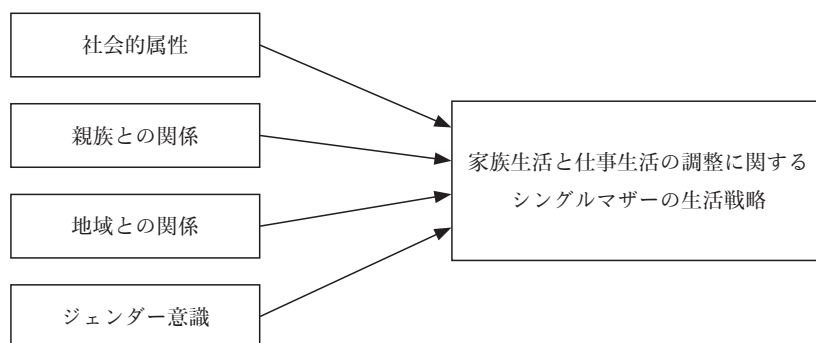


図1 本研究における分析モデル

4. 方法

(1) 調査方法

本調査の対象は、中1～高3（平成8年4月2日～平成14年4月1日生まれ）の子どもがいる母子世帯および二人親世帯である（末盛・小平・鈴木 2019）。配布数は、母子世帯が1226組、二人親世帯が824組となる。本調査は、親子のカップル調査になる。調査時期は2014年の11月である。抽出方法は住民基本台帳を基にした多段無作為抽出法である。郵送による配布および回収を行った。調査の実施の際には、本調査は無記名であること、本調査への回答は自由意思に委ねられており、回答しなくても不利益は生じないことを文書にて説明した。本調査は、日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を受け、実施されたものである（日本福祉大学「人を対象とする研究」倫理審査 申請番号：13-22 承認日：2014年8月19日）。回収数だが、母子世帯は143組（11.7%）だった。本論文の分析対象は、年齢の記入があり就業しているシングルマザー113名である。

(2) 変数

従属変数はシングルマザーの生活戦略である。生活戦略の中でも家族生活と仕事生活の調整のために取り組んでいる行為をたずねた。具体的な質問文は、「子育てと仕事で調整が必要なとき、あなたはどのような対応をしていますか。各項目について、もっとも実態に近い番号に○をつけてください」と聞いた。具体的な生活戦略の項目は以下のようなものである。「親族に子どもの世話を頼む」、「近隣に住む友人に頼る」、「公的な機関やサービスを活用する」、「仕事の出社時間を遅くしてもらう」、「仕事の退社時間を早めてもらう」、「仕事を休む」、「子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する」、「子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する」、「職場の家族支援制度（短時間勤務等）を利用する」、「自分の仕事の効率を上げる」、「自分の睡眠時間を削る」の全11項目である³。選択肢は、「よくする」「たまにする」「しない」の3点リッカート尺度である。

独立変数は、大きく社会的属性、親族との関係、地域との関係、ジェンダー意識の4つから構

成される。社会的属性として本人の年齢、学歴を用いた。年齢は年代として投入する。親族に関連するものとしては親との同居の有無、親族等との近居の有無、親との関係良好性を用いた。親との関係良好性は、「あなたとあなたのご両親との関係は（お亡くなりの場合は、生前のことをお答えください）」とたずね、「よい」「まあよい」「あまりよくない」「よくない」の4点リッカート尺度でたずねた。

地域に関連するものとしては近所の人々との関係性をたずねた。具体的には、「近所の人に挨拶をする」、「近所の人と話をする」、「近所の人の家に訪問したり、招いたりする」（以下、近所の人の家との行き来）を用いた。選択肢は、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「全くない」の4点リッカート尺度でたずねた。

ジェンダー意識に関しては性別役割意識と母性神話意識を設定した。性別役割意識は「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」、母性神話意識は「3歳になるまでは母親がそばにいたことが、子どもの成長には必要だ」である。どの質問においても「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4点リッカート尺度を用いた。上記すべての変数において数値が高まるほど、該当の項目内容を肯定する方向となっている。

5. 分析

分析は大きく2つのセクションにわけて行う。1つめのセクションでは、シングルマザーの生活戦略の規定要因に関する基礎的な分析を行う。ここでは社会的属性、親族との関係、地域との関係、ジェンダー意識の4つの要因を中心に二変量の分析を行う。

2つめのセクションでは、上記の分析で有意な関連がみられた変数について、各変数の疑似的な関連を確認するため多変量解析を行う。各変数の度数分布は表1に掲載した。

(1) シングルマザーの生活戦略の関連要因

以下、シングルマザーの家族生活と仕事生活をめぐる生活戦略はどのような要因によって関連しているのかを分析する。

i. 社会的属性と生活戦略の関連

まず社会的属性とシングルマザーの生活戦略との関連をみる。具体的には、シングルマザーの年齢、学歴と生活戦略との関連を分析する。この分析のねらいは、ひとり親が日々とる生活戦略が構造的に制約されている側面を析出することである。

まずシングルマザーの年齢と生活戦略の関連を分析した。分析手法は使用する変数が順序尺度であるためスピアマンの順位相関分析を用いた。分析の結果、シングルマザーの年齢が低いほど、「子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する」($r = -.230$ $p < .05$), 「子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する」ことが有意に高まることが示された ($r = -.298$ $p < .01$) (表2)。

表1 各変数の度数分布

	% (人)			
年齢	30歳台 15 (17)	40歳台前半 32.7 (37)	40歳台後半 41.6 (47)	50歳以上 10.6 (12)
学歴	中学校・高校卒 57.5 (65)	専門学校 15.9 (18)	短大・高専・大学卒以上 23 (26)	無回答 3.5 (4)
親との同居の有無	同居している 74.3 (84)	同居していない 23.9 (27)	無回答 1.8 (2)	
親の近居の有無	近居している 69.9 (79)	近居していない 30.1 (34)		
兄弟姉妹の近居の有無	近居している 46 (52)	近居していない 54 (61)		
おじ・おば等との近居	近居している 33.6 (38)	近居していない 66.4 (75)		
親との関係良好性	よい 40.7 (46)	まあよい 45.1 (51)	あまりよくない 12.4 (14)	よくない 0.9 (1) 無回答 0.9 (1)
近所の人に挨拶をする	よくある 69 (78)	ときどきある 30.1 (34)	あまりない 0.9 (1)	全くない 0 (0)
近所の人と話をする	よくある 35.4 (40)	ときどきある 34.5 (39)	あまりない 24.8 (28)	全くない 5.3 (6)
近所の人の家との行き来	よくある 8.8 (10)	ときどきある 37.2 (42)	あまりない 37.2 (42)	全くない 19 (16.8)
性別役割意識	そう思う 5.3 (6)	ややそう思う 11.5 (13)	あまりそう思わない 44.2 (50)	そう思わない 38.1 (43) 無回答 0.9 (1)
母性神話意識	そう思う 38.9 (44)	ややそう思う 32.7 (37)	あまりそう思わない 18.6 (21)	そう思わない 8.8 (10)

一方、シングルマザーの年齢が高まるほど「自分の睡眠時間を削る」ことが有意に多いことが示された ($r=.203$ $p<.05$) (表2)。以上から、シングルマザーの年齢が低まるほど職場において相談するという生活戦略をとることが多く、年齢が高まるほど日々の生活に対応する中で自身を犠牲にするような生活戦略をとることが多いことが示唆された。

表2 シングルマザーの年齢と生活戦略の順位相関分析の結果

	年 齢	学 歴
	r	r
親族に子どもの世話を頼む	-.117	.305**
近隣に住む友人に頼る	-.160	.157
公的な機関やサービスを活用する	-.007	-.125
仕事の出社時間を遅くしてもらう	.006	-.068
仕事の退社時間を早めてもらう	-.075	-.131
仕事を休む	-.058	-.057
子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する	-.230*	.014
子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する	-.298**	.038
職場の家族支援制度（短時間勤務等）を利用する	-.087	-.079
自分の仕事の効率を上げる	.039	.041
自分の睡眠時間を削る	.203*	.016

** $p<.01$ * $p<.05$ + $p<.10$

次にシングルマザーの学歴と生活戦略との関連の結果をみていく。シングルマザーの学歴と生活戦略の関連も両尺度が順位尺度であるためスピアマンの順位相関分析を用いた。

分析の結果は、シングルマザーの学歴と「親族に子どもの世話を頼む」のみが有意な関連を示した ($r=.305$ $p<.01$) (表 2)。高学歴のシングルマザーであるほど、親族に子どもの世話を頼めているという結果だった。係数の値は他の変数に比べやや高くなっている。その他の変数において有意な関連はみられなかった。

以上、社会的属性と生活戦略との関連をみてきた。分析の結果、シングルマザーの年齢が低まるほど子育てと仕事の両立に関して上司や同僚に相談することが増えること、年齢が高まるほど自分の睡眠時間を削ることが多いこと、学歴が高いほど親族に子どもの世話を頼むことが多いことが示された。

ii. 親族との関係と生活戦略の関連

次に親族との関係とシングルマザーの生活戦略との関連をみる。まず親との同居の有無との関連をみる。分析手法はカテゴリ変数を含むため一元配置分散分析を用いた。

分析の結果、親と同居しているほど、親族に子どもの世話を頼むことが多いことが示された ($F=14.295$ $df=1$ $p<.01$) (表 3)。親と同居していれば子どもの世話を頼みやすいと考えられ、当然の結果と言える。加えて、「仕事を休む」と 10%水準に有意な傾向を示した ($F=3.881$ $df=1$ $p<.10$)。親と同居している方が仕事を休むことが少なくなる傾向が見られた。

表 3 親との同居の有無と生活戦略の関連に関する一元配置分散分析

	親との同居の有無	
	df	F
親族に子どもの世話を頼む	1	14.295**
近隣に住む友人に頼る	1	1.688
公的な機関やサービスを活用する	1	1.729
仕事の出社時間を遅くしてもらう	1	.089
仕事の退社時間を早めてもらう	1	2.285
仕事を休む	1	3.881+
子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する	1	.053
子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する	1	.066
職場の家族支援制度（短時間勤務等）を利用する	1	1.852
自分の仕事の効率を上げる	1	.008
自分の睡眠時間を削る	1	.001

** $p<.01$ * $p<.05$ + $p<.10$

次に、住まいから車や電車で 30 分以内のところに住んでいる親族の有無（以下、近居の親族）と生活戦略との関連をみた。分析の結果、親 ($F=8.312$ $df=1$ $p<.01$)、兄弟姉妹 ($F=7.315$ $df=1$ $p<.05$)、おじ・おば・いとこ ($F=5.579$ $df=1$ $p<.05$) が親族に子どもの世話を頼むという生活戦略と有意な関連を示した (表 4)。親だけでなく、兄弟姉妹、おじ、おばなどもシングルマザー

が生活をしていく上で重要な支援の担い手となっていることが示唆された。

表4 近居の親族の有無と生活戦略の関連に関する一元配置分散分析

	df	親 F	兄弟姉妹 F	おじ・おば等 F
親族に子どもの世話を頼む	1	8.312**	7.315*	5.579*
近隣に住む友人に頼る	1	.294	.428	.238
公的な機関やサービスを活用する	1	1.107	2.592	1.170
仕事の出社時間を遅くしてもらう	1	.486	.467	.411
仕事の退社時間を早めてもらう	1	.063	.004	.548
仕事を休む	1	.650	.379	.682
子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する	1	.000	.014	.939
子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する	1	.386	.794	1.444
職場の家族支援制度（短時間勤務等）を利用する	1	.738	1.600	.958
自分の仕事の効率を上げる	1	1.779	.676	.127
自分の睡眠時間を削る	1	1.266	.126	.951

**p<.01 *p<.05 +p<.10

これまで親との同居の有無や近居の親族の有無と生活戦略の関連をみてきた。ある意味では社会構造的な状況とシングルマザーの生活戦略との関係をみてきたと言える。しかし、親族との関係は居住関係や近接性だけで規定されない部分がある。そこで次に親との関係良好性とシングルマザーの生活戦略との関連をみる。両者とも順序尺度であるためスピアマンの順位相関分析を行った。

分析の結果、親との関係が良好であるほど「親族に子どもの世話を頼む」ことが有意に多いことが示された ($r=.190$ $p<.05$) (表5)。逆に言えば、親との関係が良好でない場合、親族に子どもの世話を頼むことが有意に減少するということである。

表5 親との関係良好性と生活戦略の順位相関分析の結果

	親との関係良好性 r
親族に子どもの世話を頼む	.190*
近隣に住む友人に頼る	.042
公的な機関やサービスを活用する	.057
仕事の出社時間を遅くしてもらう	-.205*
仕事の退社時間を早めてもらう	-.167+
仕事を休む	-.086
子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する	.065
子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する	.119
職場の家族支援制度（短時間勤務等）を利用する	-.068
自分の仕事の効率を上げる	-.064
自分の睡眠時間を削る	-.092

**p<.01 *p<.05 +p<.10

加えて、親との関係良好性が良い場合、仕事での調整を行う生活戦略が有意に減少することも示唆された（表5）。具体的には、親との関係良好性が高まるほど、「仕事の出社時間を遅くしてもらおう」（ $r = -.205$ $p < .05$ ）、「仕事の退社時間を早めてもらおう」（ $r = -.167$ $p < .10$ ）といった生活戦略をとることが有意に低まることが示されている。逆に言えば、本結果は親との関係良好性が良くない場合は、仕事の出社時間を遅くしたり、退社時間を早めたりする生活戦略をとることが増える傾向があることを示唆している。

iii. 地域との関係と生活戦略との関連

次に、地域との関係と生活戦略との関連を分析する。具体的には近所の人との関係と生活戦略との関連に関する分析を行う。順序尺度同士の分析となるためスピアマンの順位相関分析を行った（表6）。

表6 シングルマザーの近所の人との関係と生活戦略の順位相関分析の結果

	挨拶をする	話をする	行き来する
	r	r	r
親族に子どもの世話を頼む	.033	-.092	.187*
近隣に住む友人に頼る	.103	.279**	.397**
公的な機関やサービスを活用する	.084	.032	-.002
仕事の出社時間を遅くしてもらおう	-.223*	-.064	-.047
仕事の退社時間を早めてもらおう	-.156	.007	.005
仕事を休む	-.148	.060	-.020
子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する	.008	.183+	.064
子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する	.064	.133	.199*
職場の家族支援制度（短時間勤務等）を利用する	.051	-.036	.023
自分の仕事の効率を上げる	.173 +	.052	-.010
自分の睡眠時間を削る	.082	.105	-.113

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

分析の結果、近所の人と挨拶をするは「仕事の出社時間を遅くしてもらおう」と有意な関連を示した（ $r = -.223$ $p < .01$ ）。近所の人と挨拶することが多いほど、自分の仕事の出社時間を遅くしてもらおうことが少なくなるという関連だった。加えて、10%水準で「自分の仕事の効率を上げる」とも有意な傾向を示した（ $r = .173$ $p < .10$ ）。その他の変数で有意な関連は見られなかった。

近所の人と話をするに関しては、「近隣に住む友人に頼る」と有意な関連を示した（ $r = .279$ $p < .01$ ）。10%水準では「子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する」と有意な傾向を示した（ $r = .183$ $p < .10$ ）。

近所の人のお家に行き来するは、「親族に子どもの世話を頼む」（ $r = .187$ $p < .05$ ）、「近隣に住む友人に頼る」（ $r = .397$ $p < .01$ ）、「子育てと仕事の両立に関して同僚に相談する」（ $r = .199$ $p < .05$ ）と有意な関連を示した（表6）。

iv. ジェンダー意識と生活戦略の関連

ここまで社会的属性、親族との関係、地域との関係のみてきた。一部、親との関係良好性などシングルマザーの主体的な要素が含まれる側面も扱ってきたが、多くはシングルマザーの社会的属性や親族、地域の状況など構造的な側面を重視した変数を検討してきた。

一方、人々は社会的に規定されているばかりではない。本人がどのように社会と自身を認識しているかによって人々がとる生活戦略は変わりうる。本稿ではこの点を検討する上でシングルマザーの社会意識を検討する。本稿では社会意識の中でもジェンダー意識にしぼってシングルマザーの生活戦略との関連性をみていく⁴。具体的には性別役割意識と母性神話意識を用いる。どちらの変数も順序尺度であるためスピアマンの順位相関分析を行った。

分析の結果、ジェンダー意識と生活戦略との間にいくつか有意な関連が示された。まず性別役割意識と生活戦略との関連の結果についてみていこう（表7）。

表7 シングルマザーのジェンダー意識と生活戦略の順位相関分析の結果

	性別役割意識	母性神話意識
	r	r
親族に子どもの世話を頼む	.064	.070
近隣に住む友人に頼る	.085	-.094
公的な機関やサービスを活用する	-.112	.033
仕事の出社時間を遅くしてもらう	.197*	.045
仕事の退社時間を早めてもらう	.229*	.078
仕事を休む	-.013	-.052
子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する	.008	-.025
子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する	-.017	-.050
職場の家族支援制度（短時間勤務等）を利用する	-.051	-.194*
自分の仕事の効率を上げる	.028	.009
自分の睡眠時間を削る	.101	.095

**p<.01 *p<.05 +p<.10

シングルマザーの性別役割意識と生活戦略との関連においては、「仕事の出社時間を遅くしてもらう」（ $r=.197$ $p<.05$ ）と「仕事の退社時間を早めてもらう」（ $r=.229$ $p<.05$ ）と有意に正の関連を示した（表7）。これは伝統的な性別役割意識をもつ者は仕事の出社時間を遅くしたり、退社時間を早める対応をより多くとっていることを示唆している。なお、他の生活戦略との有意な関連は見られなかった。

次に、母性神話意識とシングルマザーの生活戦略との関連をみていく。分析の結果、母性神話意識を持っていないものほど「職場内の家族支援制度を利用する」と有意な関連が見られた（ $r=-.194$ $p<.05$ ）（表7）。つまり、母性神話を相対化しているシングルマザーほど、職場内家族支援制度を利用しているというものである。シングルマザーで職場の家族支援制度を利用できるものはおそらく母性神話から解放されており、仕事へのコミットメントが高く職場の中でも一

定の評価を受けていることがこの結果の背景にあるものと思われる。

(2) 一般線型モデルによる検証

以上、シングルマザーの社会的属性からジェンダー意識まで分析結果を述べてきた。多様な分析結果が示されたが、どの結果も2変量の相関分析や分散分析の結果である。その結果は疑似的な関係を含んでいる可能性がある。そこで以下では、シングルマザーの個々の生活戦略に関して複数有意に関連した変数が見られたものについて多変量解析を行う。具体的には、連続変数とカテゴリー変数を同時に投入できる一般線型モデルを用いる。

まず「親族に子どもの世話を頼む」を従属変数とした一般線型モデルを行う。これまで本変数と有意な関連を示したものはシングルマザーの学歴、同居の有無、親との近居の有無、兄弟姉妹との近居の有無、おじ・おば・いとこの近居の有無、親との関係良好性、近所の家との行き来の7つの変数である。この7つの変数を同時に投入した結果、5%水準で親の同居の有無が、10%水準で学歴に有意な関連がみられた(表8)。親の同居の有無については、同居ありの平均値が2.32(95%信頼区間:1.98~2.67)、同居なしが1.80(95%信頼区間:1.58~2.03)、学歴に関しては中学・高校卒が2.08(95%信頼区間:1.80~2.36)、専門学校卒が1.77(95%信頼区間:1.37~2.16)、短大・高専・大学卒以上が2.34(95%信頼区間:2.03~2.66)であった。

表8 「親族に子どもの世話を頼む」を従属変数とした一般線型モデル

	平方和	自由度	平均平方	F 値
学歴	1.752	2	1.752	3.469 +
親の同居の有無	3.748	1	3.748	7.419**
親の近居の有無	1.223	1	1.223	2.421
兄弟姉妹の近居の有無	.528	1	.528	1.046
おじおばいとこの近居の有無	.317	1	.317	.628
親との関係良好性	2.301	3	.767	1.518
近所の人の家との行き来	1.685	3	.562	1.112

**p<.01 *p<.05 +p<.10

次に、「仕事の出社時間を遅くしてもらう」を従属変数とした一般線型モデルの結果を確認する。独立変数はこれまでの分析で有意な関連がみられた親との関係良好性、近所の人と挨拶する、性別役割意識の3つである。3つの変数を同時に投入した結果、シングルマザーの性別役割意識と「仕事の出社時間を遅くしてもらう」の間に有意な関連が示された(F=2.827 df=1 p<.05)。シングルマザーの性別役割意識の高まりと仕事の出社時間を遅くしてもらうことが有意に正の関連を示した(表9)。

表9 「仕事の出社時間を遅くしてもらう」を従属変数とした一般線型モデル

	平方和	自由度	平均平方	F 値
親との関係良好性	1.425	3	.475	1.671
近所の人と挨拶する	1.336	2	.668	2.349
性別役割意識	2.412	3	.804	2.827*

**p<.01 *p<.05 +p<.10

次に、仕事の退社時間を早めてもらうことを従属変数とした一般線型モデルによる分析を行った。独立変数はこれまで本従属変数と有意な関連を示した親との関係良好性と性別役割意識である。分析の結果、シングルマザーの性別役割意識が伝統的であるほど、仕事の退社時間を早めてもらうことが有意に多いという関連がみられた（表10）。

表10 「仕事の退社時間を早めてもらう」を従属変数とした一般線型モデル

	平方和	自由度	平均平方	F 値
親との関係良好性	1.520	3	.507	1.735
性別役割意識	2.622	3	.874	2.993*

**p<.01 *p<.05 +p<.10

次に、「子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する」の一般線型モデルの結果を検討する（表11）。独立変数は、シングルマザーの年齢と近所の人と話をするの2変数である。分析の結果、年齢と近所の人と話をするの双方に10%水準で有意な傾向の関連がみられた。以上から、年齢が低いほど、近所の人と話をするほど、子育てと仕事の両立に関して上司に相談する傾向が確認された。

表11 「子育てと仕事の両立に関して、上司に相談する」を従属変数とした一般線型モデル

	平方和	自由度	平均平方	F 値
年齢	2.344	3	.781	2.192+
近所の人と話をする	2.610	3	.870	2.440+

**p<.01 *p<.05 +p<.10

次に、「子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する」を従属変数とした一般線型モデルの結果にうつる。独立変数はこれまでの分析で有意だったシングルマザーの年齢と近所の人との行き来である。分析の結果、こちらはシングルマザーの年齢のみが有意な関連性を示した。年齢が低まるほど、子育てと仕事の両立に関して同僚に相談していることが示唆された。

表12 「子育てと仕事の両立に関して、同僚に相談する」を従属変数とした一般線型モデル

	平方和	自由度	平均平方	F 値
年齢	2.762	3	.921	2.709*
近所の人との行き来	1.570	3	.523	1.540

**p<.01 *p<.05 +p<.10

6. まとめ

以上、シングルマザーの家族生活と仕事生活の生活戦略の規定要因に関する計量分析を行ってきた。以下でこれまでの分析結果をまとめ、今後の課題を述べる。

本分析の結果、シングルマザーの生活戦略の4つの規定要因が示された。4つとは、①年齢、②学歴、③親との同居、④ジェンダー意識である。以下各々の結果とその示唆について述べていく。

1つ目はシングルマザーの年齢と生活戦略の関連である。一般線型モデルの結果、シングルマザーの年齢が低まるほど、子育てと仕事の両立について上司や同僚に相談していることが示された。加えて、順位相関分析の結果では、年齢が高まるほど自分の睡眠時間を削ることが有意に高まることも示されていた。年齢という変数は他のさまざまな指標の特性を取り込んだものであり、今後も疑似関連の検討を慎重に行っていく必要はある。ただ本分析の結果の範囲でいえば、若い世代のシングルマザーは生活をしていくのに際し周囲の方に相談していく生活戦略をとることが多く、年齢が高まるほどそうした戦略をとることが少ないこと、そして自分の睡眠時間を削るなど自己犠牲的な生活戦略をとる傾向は年齢が高いシングルマザーであるほど多いということである。

この結果は子どもの年齢の影響を受けている可能性がある。なぜならば、子どもの年齢が低い方が子育てと仕事の両立について上司や同僚に相談する可能性が考えられるためである。以上から、子どもの年齢と母親の年齢とを同時に投入した分析を追加的に行ったところ、子どもの年齢による影響、母親の年齢の影響双方がみられる結果となった。つまり、年齢が低まるほど上司や同僚に相談していく傾向は部分的には子どもの年齢によって生じている。しかし、母親の年齢が低まるほど上司や同僚に相談していく傾向もみられた。以上から、年代の若いシングルマザーほど、周囲の人々に声をかけながら暮らしている可能性が部分的ではあるが示唆された⁵。

2つめの知見はシングルマザーの学歴をめぐるものである。親族に子どもの世話を頼むに関しては、学歴をはじめそれまでの分析で有意性が確認された7つの変数を同時に投入した一般線型モデルを実施した。その結果、親との同居の有無とともにシングルマザーの学歴との間に10%水準ではあるが有意な傾向が確認された。親との同居の有無は親族に子どもの世話を頼むと概念的に近似していることもあり、両者の間に有意な関連が見られることは当然の結果と言える。むしろ着目すべきは、親の同居の有無に加え、他の親族の近居の状況をたずねた項目を投入した上でシングルマザーの学歴と「親族に子どもの世話を頼む」の関連の有意性が保持されたことである。シングルマザーの暮らしの中で大きなポイントの1つは親族からの支援を得るかどうかがある。おそらくこの結果はシングルマザーの学歴が直接的な効果を持っているというより、シングルマザー本人の教育達成を支えることができた家族はシングルマザーを支えていくだけの力を持つことが多いことによるものと思われる。

3つめは、親との同居についてである。親からの支援はシングルマザーの暮らしを考えていく上で1つの要素だが、親と同居している方が子どもの世話を頼みやすいことが示された。その一方で、親との関係性があまり良好でない場合は、親からの支援を受けないという関連も順位相関分析では示唆されていた。一般的には、親族からの支援を受けることが望ましいと考えられがちだが、各々の親子関係の中で多様な状況があることに留意する必要があると思われる。

4つめはジェンダー意識に関する結果である。一般線型モデルの結果、伝統的な性別役割意識を持つ程、出勤時間を遅らせたり、退社時間を早めたりしていることが示された。この結果は、伝統的な性別役割意識が高いと自身が家族責任を担うものと認識することにつながり、その家族イメージを保持するために自身の仕事を減らして家族生活を優先していることを示唆していると思われる。

この結果は、一見伝統的な性別役割意識を持っているシングルマザーが自身の選択として家族を優先しているようにみることでもできる。しかし本稿では社会学な視点を含めてこの結果を解釈したい。シングルマザーに伝統的な性別役割意識をもたせているのはシングルマザー自身というより社会の方である。日本の性別役割意識は国内の動向で見れば革新的な性別役割意識を持つ者が増える傾向にあるが、国際的にみるとまだ伝統的な性別役割意識を支持する割合が高い国である。こうした国内の性別役割意識の状況、そして離婚が親の選択だと理解される傾向がある中、子どもを育てているシングルマザーは家族を優先することを社会から求められている。そのため日本のシングルマザーは伝統的な性別役割意識を一定持たざるをえない状況に置かれている。こうした状況下でシングルマザーは子育てのために出勤時間や退社時間の調整を行っているものと推測される。

以上の知見を研究上の意味合いも含めて整理しておこう⁶。シングルマザーの家族生活と仕事生活の調整に関わる生活戦略は、本人の年齢、学歴といった社会的属性やジェンダー意識によって変化することが本研究の分析により示された。学歴が高いほど親族からの支援を受けていることはシングルマザーの生活戦略が社会階層の影響下にあることを示唆するものだった。また、ジェンダー意識が伝統的であるほど、仕事の出社時間を遅らせたり、退社時間を早めたりしていた結果は、シングルマザーにおいても性別役割意識などのジェンダー意識を媒介としたジェンダー秩序の再生産が生じている可能性を示唆するものと言えるだろう（江原 2021）。

最後に本研究の限界や課題を述べる。限界の1つめは計量分析とは言えケース数は少なく、結果の妥当性に関しては慎重な見方をとっておく必要があることである。ケース数が少ないため分析手法も比較的安全な一般線型モデルを選択している。より多くのサンプルサイズのデータを用いてより高度な分析手法を使用しより精度の高い分析結果を提示することが今後の課題となる。

2点目は本データの地域性である。本データは全国サンプルではなく中部エリアの特定の地域から得られたものである。他のエリアでも同様な結果になるかは今後の検証を待たなければならない。

以上の課題はあるが、シングルマザーがさまざまな社会構造や社会規範に囲まれながら子育て

と仕事にどう対峙して暮らしているかを明らかにしていくことは今を生きるシングルマザーの現状への理解を深め、ひとり親世帯に対する支援や政策を考えていくための基礎的な資料になると思われる（近藤 2013；杉本・森田 2009）。本分野の研究が今後活性化していくことを期待したい。

注

1. 対抗的な行為との関連でいえば、ジェンダー理論におけるバトラーの議論が存在する（バトラー 1999）。バトラーが編み出した概念の1つにジェンダー・トラブルがあるが、そこではあえてジェンダー上のトラブルを起こしていくという視点がある。生活戦略ではこうした意図的にトラブルを起こすような行為も生活戦略としてとり込んでいく。
2. ひとり親を調査対象とはしていないが、家族生活と仕事生活に関する調整や対応を扱っている海外の研究としては Becker and Moen（1999）がある。ただこうしたテーマを取り上げる研究は海外でも少ない。
3. 本研究は扱う変数が多い。そのため従属変数である生活戦略に関しては、独立変数と従属変数の判別をしやすいするためカッコ書きで表記する。
4. ジェンダー意識は自身による選択性を含んでいるが、社会的に規定される部分も含んでいる。
5. もう1つの解釈としては、若いときは周囲に声をかける選択肢しがなく、ある程度年をとると自分で切り抜けられるようになるという可能性も考えられる。
6. 「近所に住む友人に頼る」に関して複数の変数が有意を示したが、どれも上記の変数と概念的に近似した変数であるため紙面の制約もあり結果の表示を省くこととした。

文献

- 愛知県, 2017, 『平成 28 年度愛知県ひとり親家庭等実態調査』
- 赤石千衣子, 2014, 『ひとり親家庭』岩波書店
- Becker, P. E. and Moen, P., 1999, Scaling Back: Dual-Earner Couples' Work-Family Strategies. *Journal of Marriage and Family* 61: 995-1007
- ブルデュー, P, 1991, 『構造と実践』藤原書店
- バトラー, J, 1999, 『ジェンダー・トラブル』青土社
- 江原由美子, 2021, 『ジェンダー秩序 新装版』勁草書房
- 藤原千沙, 2022, 「シングルマザーの仕事と副業・兼業一労働のフレキシビリティとケア」『経済志林』89 (3), 195-224
- ギデンズ, A, 2009, 『社会学』（第5版）而立書房
- ギデンズ, A, 2015, 『社会の構成』勁草書房
- 神原文子, 2020, 『子づれシングルの社会学—貧困・被差別・生きづらさ』晃洋書房
- 近藤理恵, 2013, 『日本、韓国、フランスのひとり親家族の不安定さ—リスク回避の新しい社会システム』学文社
- 厚生労働省, 2017, 『平成 29 年版厚生労働白書』
- 厚生労働省, 2022, 『令和 3 年度全国ひとり親世帯等調査結果報告』
- マートン, R, 1961, 『社会学理論と社会構造』みすず書房
- 水無田気流, 2014, 『シングルマザーの貧困』光文社
- 内閣府, 2022, 『男女共同参画白書令和 4 年度版』
- 中村文哉・鈴木健之・宇都宮京子・佐藤嘉一, 2020, 『行為論からみる社会学—危機の時代への問いかけ』晃洋書房
- 中園桐代, 2021, 『シングルマザーの貧困はなぜ解消されないのか：「働いても貧困」の現実と支援の課題』

勁草書房

大石亜希子, 2015, 「母子世帯の「時間の貧困」—子どもの権利として親と過ごす時間の確保を」『週刊社会保障』2819, 54-59

末盛慶, 2017, 「生活戦略という概念の可能性」『現代と文化』136, 153-167

末盛慶・小平英志・鈴木佳代, 2019, 「シングルマザーの家族生活と仕事生活をめぐる生活戦略: 自己努力型の生活戦略をとる背景」『地域ケアリング』21 (10), 78-81.

杉本貴代栄・森田明美, 2009, 『シングルマザーの暮らしと福祉政策—日本・アメリカ・デンマーク・韓国の比較調査』ミネルヴァ書房

鈴木大介, 2015, 『最貧困シングルマザー』朝日新聞出版

高橋美恵子編, 2021, 『ワーク・ファミリー・バランス—これからの家族と共働き社会を考える』慶應義塾大学出版会

田宮遊子・四方理人, 2007, 「母子世帯の仕事と育児—生活時間の国際比較から」『季刊社会保障研究』43 (3), 219-231

鳥山まどか, 2021, 「ひとり親世帯の貧困—所得と時間」松本伊智郎・湯澤直美編著『生まれ, 育つ基盤—子どもの貧困と家族と社会』明石書店, 175-191

山口一男, 2009, 『ワークライフバランス—実証と政策提言』日本経済新聞社

湯澤直美, 2021, 「コロナ禍におけるシングルマザーの労働と子育て」『学術の動向』26 (11), 28-34.